

こころ日記「ぼちぼち」 その③

なつかしい日々

最近、よく自分の仕事を振り返ることがある。30年以上の学校という環境での仕事は、私自身の半生でもある。何よりたくさん子どもたちとの出会いが、今になって蘇ってくる。今でも年賀状を交換する教え子がいる。

最近出前性教育に忙しいのだが、色々な学校へ行くと、なかには教え子が担任をしているクラスがあったりして、本当に年月の経過を実感する。

中学校で生徒会長をしていたH先生は、教師歴8年。子ども2人を持ち、1年の育休をとった父親だ。公務員でもある教員が、育休をとる男性はまだ少ない。学年主任のT先生は、「中学の時に性教育を教えてもらったこと、忘れられません」と言ってくれた。

現役時代は、毎日の学習と行事をこなすのに必死だった。特に担任を持つと、40人近い子どもたちの成長のために1年間の学級経営を立てる。どんなクラスにしようか、あの子にどう育ててほしいかなど、色々思い巡らしたものだ。書店に行ったら、何かやれることがないかを考えることが楽しかった。30年前は、教員はもう少しゆとりがあった。教員が主催する研究サークルも盛んで、休みには地方へ出かけては様々な教材なども仕入れてきた。全国の先生達との交流の場もあり、できることは何でもやってみたいと思ったものだ。

子どものためというより、むしろほぼ自己満足だったかもしれないが、時には学級の様子が変化することもあったし、そのことがまた次への希望につながることもあった。

とはいえ、毎日の生活で一番に気を遣ったことは、当たり前だが子どもたちの一人

一人の「いのち」だ。喧嘩やケガ、事故など小さなことはあるが、「今日一日、みんなが無事でありますように」と願うこと、これも学級経営では欠かせない課題だと思う。

学級経営って何？

先日、久しぶりに本屋で教育関連コーナーをのぞいてみた。学級経営のハウツー本がずらり。学級経営という言葉は、もう死語に近く使わないと思っていたが、学級崩壊が問題になっているからか？たくさんの関連本に少々驚いた。

残念なことに、学校現場から漏れくる言葉に「学級崩壊」という言葉をよく耳にする。

子どもが学級から飛び出したり、立ち歩いたりなど、学習が成立しないことが多々あるとか。現場のことは現場の人にしかわからないのは重々知っているが、何とかならないのかなあと感じてしまう。



今学校現場は、世代交代の過渡期だ。ある時期、教員採用数が極端に少ないときがあった。その弊害が今起きていて、ベテランの退職者が多く、現場は一気に若い世代となっていて、20代の教員が半分以上を占めている。さらに妊娠、出産など休暇を取る先生も多い。学年途中での担任が変わることで、子どもたちの不安も増す。それによって不登校になるのも珍しくない。

若い教員であれば、思春期の子どもたちと年が近いから話題にも事欠かないのではと思うが、なかなかそれも上手くはいかないようだ。これといった解決策はないが、せめて学級経営のハウツー本で、何か変化を求めたい教員がいてほしいと思う。



時折、若い教員を話す機会がある。なかなか学級を一つの集団として見るのが苦手なようだ。問題のある子どもだけを何とかしたいという思いが強く、その子がいるから学習が進まないのだと言う。

学校は相変わらず、いや益々学力偏重に陥っているように思える。IT 授業も導入され、教員に求められる仕事も多種で多忙だ。毎日の残業に疲弊する若い教員の声は切実だ。そこに学級経営はどうか？と指摘されても、ベテラン教員からのアドバイスももらえない状況では、何をどう学級を立て直せばいいのか、わからなくて当たり前だと思う。

教師の仕事は、ある意味「職人技」的な側面があると思う。先輩の授業を見て、使えるアイデアは何でも真似ていたことを思い出す。

変わらない学校

私の学校時代と比べてみると、変化したこと、良くなったことはたくさんあるが、変わらないこともまだまだたくさんある。

中学校であれば、校則だ。最近制服も女子、男子の区別なく、ズボン、スカートを選擇できる学校が増えた。たまに、スカートを履いてくる男子がいるらしいが、頼もしいと思う。

髪の毛の加工も染めることもいけない。ピアスも…。そのことと学力とは関係ないのだが、教員は生徒指導と称して厳しく対

応する。一体だれが困るのか？という疑問が湧いてくるが、実際に現場にいと、それを批判することができなかった自分がいたことも事実だ。

相変わらず、前を向いて一斉授業。教室には、細かいルールが貼ってある。掃除当番表、仕事の細かいルールもある。「〇〇はしません」の文言が多いのも、日本の教育の特徴だと思う。まず禁止から入る。では「してもいいことは何？」と聞きたくなる。これは悪しき学級経営の一つだ。

みんなと同じことをしなくてはダメという空気があることで、居場所がなくなる子どもが増えている。不登校になるのは、その意思表示だ。



専門家に託す

学校での困りごとは、最近専門家に、あるいは学校以外の組織に託す傾向にあると思っている。

適応教室もその一つだ。学校への行き渋りが数日続いただけで、教員は不登校と決めつけてしまう。何とか適応教室で面倒をみて欲しいという思いが伝わってくるが、学校へ行かないことがそんなに問題なのか。今の学校なら、行かなくてもいいと私は思っている。学校はおもしろいかどうか、楽しく学べるか、自分の思いが言えるか。どうだろうか。

地域で、自身が運営する「性と生」の情報発信の場に、学校で起きた性の加害・被害の相談が増えている。人権の問題だと思うが、「性」のことは教員が苦手とする事柄なのか、どうも手に負えないことらしい。

いくら扱いにくいことであっても、「いのち」に関わることについては、何とか解決しようという気概があっても良いのではないかと思うのは、私の我がままだろうか。

つづく